神奈川県海老名市

望地遺跡発掘調査報告書

－第９次調査－

2018

海老名市教育委員会

例　言

1．本書は海老名市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書であり、望地遺跡（海老名市No.34遺跡）第９次調査について収録している。

2．発掘調査は、神奈川県海老名市望地一丁目208番１における個人住宅の建設に伴う事前の記録保存調査として実施し、調査に係る費用は「国宝重要文化財等保存整備費補助金」及び「指定文化財保存修理等補助金」を受けて実施した。本報告書作成については、「国宝重要文化財等保存整備費補助金」及び「神奈川県市町村事業推進交付金」を受けて実施した。

3．現地発掘調査は平成17年度に海老名市教育委員会生涯学習部文化財課の館まりこ（今野まりこ）が担当し、実施した。

4．出土品整理等は平成29年度に行い、報告書の作成を行った。

5．整理作業は市川由希子（海老名市教育委員会教育総務課文化財係）が行い、本書の執筆は今野まりこ、押方みはる（海老名市教育委員会教育総務課文化財係）が以下のとおり分担し、全体の編集は今野まりこが行った。

今野まりこ　第１～３章

押方みはる　第４章

6．写真撮影は、現地調査については今野が行い、遺物写真は向原崇英（海老名市教育委員会教育総務課文化財係）が行った。

7．本書の遺構、遺物の挿図の指示は次のとおりである。

・遺構（調査区）実測図の方位は真北を示し、水糸高は海抜高度を指す。

・土層観察の色調は『新版標準土色帖』2001年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠している。

・挿図の縮尺は各図に示す。

8．本書に係わる出土品及び記録図面等は海老名市教育委員会で保管している。

9．発掘調査及び整理調査に際し、次の諸氏、諸機関よりご協力、ご教示賜った。（順不同、敬称略）

木下良、武部健一、木本雅康、荒井秀規、田尾誠敏、河野一也、木村正幸、猪狩洋康、有限会社ブラフマン、神奈川県教育委員会文化遺産課

目　次

第１章　調査の経過 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査経過 …… 1
　第３節　調査等体制 …… 2

第２章　遺跡概観 …… 2
　第１節　地理的環境 …… 2
　第２節　歴史的環境 …… 4
　　１．周辺の遺跡 …… 4
　　２．調査歴 …… 8

第３章　調査の方法と成果 …… 10
　第１節　調査の方法 …… 10
　第２節　基本層序 …… 10
　第３節　発見された遺構と遺物 …… 12
　　１．奈良～平安時代 …… 12
　　（１）道路状遺構 …… 12
　　２．縄文時代 …… 12
　　（１）ピット …… 12
　　（２）遺構外出土遺物 …… 14

第４章　まとめ …… 16

　引用・参考文献 …… 20

挿図目次

第１図　周辺地形分類図及び望地遺跡位置図 …… 3
第２図　周辺の奈良～平安時代の主要な遺跡 …… 7
第３図　望地遺跡調査位置図 …… 9
第４図　調査区配置図 …… 11
第５図　道路状遺構平面図・断面図 …… 13
第６図　道路状遺構出土遺物実測図 …… 14
第７図　縄文時代遺構平面図・断面図 …… 15
第８図　遺構外出土遺物実測図 …… 15
第９図　望地遺跡の道路状遺構 …… 17
第10図　海老名市内の古代道路状遺構 …… 18
第11図　望地遺跡周辺の古代交通路 …… 19

表 目 次

第１表　調査に係る届出等の経過一覧 …… 2
第２表　望地遺跡調査等歴 …… 10
第３表　ピット一覧表 …… 12
第４表　道路状遺構出土土器観察表 …… 14
第５表　道路状遺構出土瓦観察表 …… 14
第６表　遺構外出土遺物観察表 …… 15

写真図版目次

写真図版１　１　調査地近景（南東から）
　　２　道路状遺構硬化面（西から）
写真図版２　１　道路状遺構完掘状況（南東から）
　　２　道路状遺構波板状凹凸面（南西から）
写真図版３　１　道路状遺構北側土層堆積状況
　　２　道路状遺構南側土層堆積状況
写真図版４　１　試掘調査状況（南から）
　　２　試掘調査遺物出土状況
写真図版５　１　道路状遺構出土遺物
　　２　遺構外出土遺物
　　３　図化不能出土遺物

第１章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯

望地遺跡第９次調査（海老名市望地一丁目208番１ほか）は、個人専用住宅建設に伴うものである。平成17年７月22日に事業者から海老名市教育委員会（以下、「市教育委員会」という。）へ埋蔵文化財の試掘調査に関する照会があった。事業計画地は周知の埋蔵文化財包蔵地（海老名市No.34）に該当し、住宅建築に伴う切土が埋蔵文化財に影響を与える恐れがあるため、市教育委員会は事業者へ試掘調査が必要である旨を回答した。

この回答を受けて事業者は平成17年７月26日付で市教育委員会に試掘調査を依頼し、市教育委員会は同年８月２日から４日に試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、奈良～平安時代の道路状遺構が確認され、土師器、須恵器等の遺物が出土した。望地遺跡第６次調査においても同様の道路状遺構が確認されており、その延長と想定されたことから、市教育委員会は事業者に対して結果を通知するとともに、土木工事により遺構を損傷する部分の発掘調査の実施について協議を行った。

平成17年７月29日付で事業者より提出された文化財保護法第93条の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出に対し、事業者と市教育委員会宛てに、神奈川県教育委員会教育長より事業者が発掘調査を実施するよう通知がされた。これを受けて、文化財保護法第99条に基づき市教育委員会が記録保存の発掘調査を実施することとした。

なお、発掘調査に係る届出等の経過は第１表のとおりである。

第２節　調査経過

試掘調査の結果に基づいて、事業者及び代理人と協議を行ったのち、発掘調査を開始した。調査は、今回切土される範囲のうち、過去の造成時に切土され埋蔵文化財が残存していない部分を除いた23㎡について発掘調査の対象範囲とした。発掘調査期間は、平成17年８月15日から20日までの６日間で実施した。

現地での発掘調査終了後、平成17年度に遺物洗浄及び概要報告書の作成、平成29年度に出土品整理、図面作成等の整理調査を行い、発掘調査報告書作成業務を行った。

第１表　調査に係る届出等の経過一覧

文書種別・内容	文書番号	日付	発信者	受信者
1　埋蔵文化財試掘調査に関する照会				
埋蔵文化財試掘調査に関する照会書		平成17年７月22日	事業者	海老名市教育委員会教育長
同回答	海教文発第128号	平成17年７月26日	海老名市教育委員会教育長	事業者
2　試掘調査				
試掘調査の依頼		平成17年７月26日	事業者	海老名市教育委員会教育長
調査結果に基づく回答	海教文発第135号	平成17年８月８日	海老名市教育委員会教育長	事業者
3　文化財保護法第93条に基づく埋蔵文化財発掘の届出				
届出		平成17年７月29日	事業者	神奈川県教育委員会教育長
進達	海教文発第139号	平成17年８月９日	海老名市教育委員会教育長	神奈川県教育委員会教育長
通知	生文17第6-1076号	平成17年８月26日	神奈川県教育委員会教育長	事業者
市送付	海教文発第156号	平成17年８月31日	海老名市教育委員会教育長	事業者
4　出土品の手続き（試掘調査）				
埋蔵物発見届		平成18年２月３日	海老名市教育委員会教育長	海老名警察署長
出土文化財保管証		平成18年２月３日	海老名市教育委員会教育長	神奈川県教育委員会教育長
埋蔵物の文化財認定と帰属について	生文17第5-2063号	平成18年３月30日	神奈川県教育委員会教育長	海老名市教育委員会教育長
出土文化財の譲与について（申出）	生文第663号	平成21年11月19日	神奈川県教育委員会教育長	海老名市教育委員会教育長
出土文化財の譲与について（回答）	21海生文収第347号	平成21年11月30日	海老名市教育委員会教育長	神奈川県教育委員会教育長
出土文化財の譲与について（通知）	生文第709号	平成21年12月24日	神奈川県教育委員会教育長	海老名市教育委員会教育長
5　出土品の手続き（本発掘調査）				
埋蔵物発見届		平成18年２月３日	海老名市教育委員会教育長	海老名警察署長
出土文化財保管証		平成18年２月３日	海老名市教育委員会教育長	神奈川県教育委員会教育長
埋蔵物の文化財認定と帰属について	生文17第5-1064号	平成18年３月30日	神奈川県教育委員会教育長	海老名市教育委員会教育長
出土文化財の譲与について（申出）	生文第663号	平成21年11月19日	神奈川県教育委員会教育長	海老名市教育委員会教育長
出土文化財の譲与について（回答）	21海生文収第347号	平成21年11月30日	海老名市教育委員会教育長	神奈川県教育委員会教育長
出土文化財の譲与について（通知）	生文第709号	平成21年12月24日	神奈川県教育委員会教育長	海老名市教育委員会教育長

第３節　調査等体制

発掘調査（平成17年度）　※所属・肩書は平成17年度のもの

調査組織　海老名市教育委員会

海老名市教育委員会教育長 牛村忠雄、生涯学習部長 尾山勇、生涯学習部次長 清田一秀、文化財課長 飯田幸一、文化財係長 普川勝広、主任主事 須田誠、主事 向原崇英、主事 舘まりこ（担当）、主事 瀬戸圭一

出土品整理・報告書作成（平成29年度）

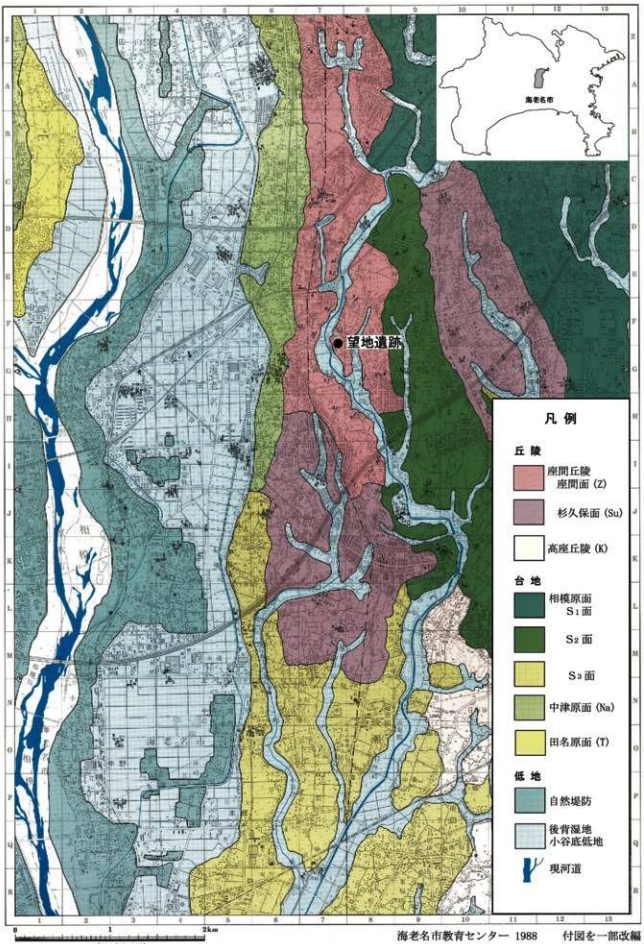
調査組織　海老名市教育委員会

海老名市教育委員会教育長 伊藤文康、教育部長 岡田尚子、教育部次長 金指太一郎、教育総務課長吉川浩、文化財係長 押方みはる、主査 今野まりこ（担当）、主任主事 向原崇英、主事 小川恭平、臨時職員 市川由希子

第２章　遺跡概観

第１節　地理的環境（第１図）

望地遺跡は、神奈川県海老名市望地一、二丁目に所在し、海老名市の北東に位置する。遺跡の東側は、綾瀬市との市境にあたる。相模鉄道と小田急小田原線海老名駅の東方約1.5km



海老名市教育センター 1988　付図を一部改編

第１図　周辺地形分類図及び望地遺跡位置図

に位置し、遺跡のほぼ中央を県道横浜・厚木が東西に走っている。

本遺跡の所在する海老名市は、神奈川県のほぼ中央に位置し、相模川の左岸に存在する。市域の地形は大きく分けると、西側は相模川の浸食、堆積によって形成された沖積低地、東側は相模野台地、座間丘陵から成り立っている。本遺跡は、座間丘陵座間面の南西部にあたり、南流する目久尻川が座間丘陵を東西に分断した左岸に立地する。本次調査地点は、目久尻川によって形成された支谷により南北に長く張り出した丘陵の西側斜面に位置する。

目久尻川の沖積低地は標高約30mで、本次調査地点は約42mを測り、低地とは約12mの比高差がある。眺望がよく、西には大山・丹沢を望むことができる。

第２節　歴史的環境

１．周辺の遺跡（第２図）

市域には旧石器時代から近世に至るまで各時代の遺跡が台地、丘陵、相模川河岸の自然堤防上を中心に多く確認されている。望地遺跡第９次調査では、縄文時代と奈良～平安時代の遺構・遺物が出土しているが、ここでは道路状遺構と同時期にあたる奈良～平安時代の周辺遺跡について概観する。

相模国分寺跡（海１）

目久尻川を挟んだ対岸の相模野台地上に国指定史跡の相模国分寺跡と相模国分尼寺跡がある。相模国分寺跡は、望地遺跡から西に約600mのところに位置し、江戸時代後期に編纂された『新編相模国風土記稿』に記載されるほど古くから知られ、これまで11次に亘る発掘調査が行われている。法隆寺式伽藍配置を採っており、発掘調査により、塔、金堂、講堂、中門、僧坊等の遺構が確認されている。創建期の瓦は、主に横須賀市乗越瓦窯からの供給、その後瓦尾根瓦窯等南多摩地域の瓦が主体となる状況が判明している。また、確認された区画溝から、東西約240m、南北約300mの範囲であったと考えられている。

国分宿遺跡（海53）

相模国分寺跡を内包する国分宿遺跡からは、８世紀初頭の土器を出土する竪穴住居址が検出されており、相模国分寺跡創建年代を探る重要な手がかりとなっている。

逆川跡（海37）

国分寺創建に深く関連すると考えられている人工水路とみられる。発掘調査により、流路跡と船着場と考えられるテラス状の遺構が確認されており、出土土器等から８世紀の半ばに造営が始まっていたと考えられる。相模国分寺建立に伴う資材運搬に伴う遺構と考えられているが、平安時代中期までに本来の用途を失っていたと考察されている（樋口1963）。

相模国分尼寺跡（海２）

相模国分尼寺跡は、本遺跡の北西約１kmの場所に位置する。これまでに24次に亘る調査が行われており、金堂、講堂、鐘楼・経蔵、廻廊などの遺構が確認されている。確認された区画溝や周辺の地形から伽藍地は175～200m四方と推定される。相模国分尼寺跡の出土瓦は瓦尾根瓦窯のものを主体とする。

上の台遺跡（海44）

相模国分寺跡から南東に約150mの座間丘陵上にあったが、現在は道路の開削及び宅地造成で完全に消滅している。正式な発掘調査がされておらず詳細は不明であるが、『相模国分寺志』（中山・矢後1924・1934）によると、礎石建の建物があったことが報告されている。この遺構から西へ36mほど行ったところには瓦溜りが確認されており、その調査内容から瓦尾根瓦窯及び南多摩瓦窯と少量の三浦半島系のものが入ることが確認されている。旧来この地一帯は現在の国分寺を含め「薬師堂」と呼ばれており、国分寺に関連した何らかの遺跡（寺院）があったことを物語っている。

国分尼寺北方遺跡（海35）

相模国分尼寺跡の北方に広がる国分尼寺北方遺跡では、多くの奈良・平安時代の遺構・遺物が確認されている。第７次調査では、庇付掘立柱建物址と溝状遺構が確認された。柱穴から「法華寺」と墨書された土師器が確認されたことから相模国分尼寺跡の寺域内であることが濃厚となり、溝状遺構は、区画溝と考えられている。また、奈良～平安時代の竪穴住居址や掘立柱建物址とともに墨書土器なども多く出土しており、尼寺跡との関連性が密であることが考えられる。

第13、18次調査では、県道杉久保座間に沿うように南北方向に道路状遺構が確認されている。第13次調査の道路状遺構は、側溝があり、つくり替えも行われている。４～７mの幅員があり、出土遺物から古代～中世のものとされている。第18次調査の硬化面は７面に及んでいる。

国分南原西遺跡（海54）

相模野台地縁辺部にあり、相模国分寺跡の南側約500mに位置する。平安時代の竪穴住居址、や土坑、溝状遺構等が確認されている。竪穴住居址内からは、カマド構築材以外にも瓦が床面や覆土から多く出土していることが注目される。

上浜田遺跡（海45）

目久尻川を挟んだ望地遺跡対岸の丘陵部と谷戸部に広がる上浜田遺跡は、奈良～平安時代の集落跡であり、５期の集落変遷が考えられている。平安時代に編纂された『延喜式』段階の古代東海道の浜田駅の位置については諸説あるが、海老名市大谷に上浜田、下浜田の小字名が残り、厚木街道が浜田に通じることから、この上浜田遺跡、大谷下浜田遺跡周辺であったと推定されている。

大谷下浜田遺跡（海69）

座間丘陵上に位置し、上浜田遺跡の南に広がる遺跡で、奈良～平安時代から中世の建物址等の遺構が見つかっている。第14、15次調査では、座間丘陵頂部を東西に横断する平安時代の道路状遺構が確認されている。

大谷市場遺跡（海80）

上浜田遺跡の西側にあり、丘陵斜面地から台地上に展開する集落遺跡である。区画整理事業に先立つ発掘調査で古墳時代後期から平安時代にかけての竪穴住居址や掘立柱建物址が確

認されている。竪穴住居址や掘立柱建物址は７世紀から８世紀前半を主体とし、桁行が４間以上の大形建物も複数みられ注目される。

大谷向原遺跡（海77）

大谷下浜田遺跡の南に位置し、古墳時代後期から平安時代の大規模な集落跡が確認されており、５期の変遷を与えられている。「高坐官」の墨書土器や風字硯、刀子、海老錠等の出土や総柱式掘立柱建物址の存在は、高座郡の有力氏族壬生氏との関連が考えられる。

大谷真鯨遺跡（海60）

丘陵の尾根から谷戸部にかけて展開する集落遺跡であり、遺跡としては大谷向原遺跡とは別になっているが、同一集落であったと思われる。谷戸部には大型の井戸が２基設けられており、井戸から伸びる溝状遺構から「大宅」と墨書された土師器坏が出土している。

杉久保釜坂遺跡（海89）

座間丘陵の縁辺部に位置する。９世紀から10世紀にかけての竪穴住居址、掘立柱建物址等が検出されている。「千内」、「千」といった墨書土器も出土している。

杉久保内藤原遺跡（海90）

相模野台地の南西縁に位置する。竪穴住居址、掘立柱建物址等が検出されており、概ね９世紀後半の所産と考えられている。

本郷遺跡（海３）、本郷中谷津遺跡（海４）

相模川と釜坂川に挟まれた相模野台地の南端に近い平坦な台地上に位置する。本郷中谷津遺跡と本郷遺跡は、南北に連なっており、近接している。いずれも奈良～平安時代の大集落が確認されている。遺物としては、墨書土器、緑釉陶器、灰釉陶器、帯金具、海老錠等の鉄製品など特殊なものも出土しており、富裕層や在地化した地方官人等の居住も想定されている。

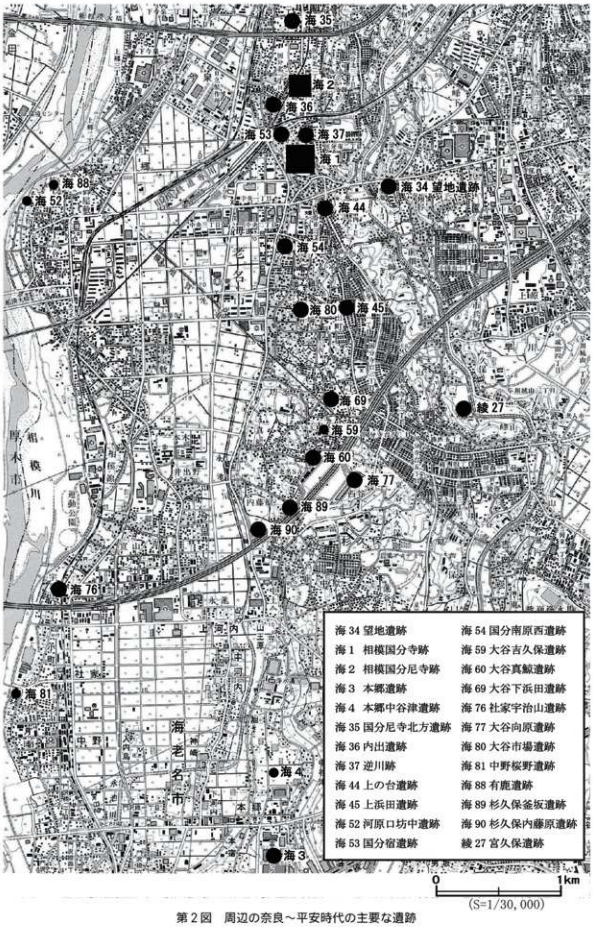
社家宇治山遺跡（海76）

相模川東岸の自然堤防上の社家宇治山遺跡では８～９世紀にかけての竪穴住居群や溝が確認されている。また、８～10世紀の南北に続く道路状遺構も確認されている。

宮久保遺跡（綾27）

目久尻川沿いの右岸にある綾瀬市の宮久保遺跡は、台地裾部から低地にかけて立地し、望地遺跡の南約２㎞に位置する。遺跡からは、100軒を超す竪穴住居址や掘立柱建物址のほかに、井戸や河道等が発見されている。井戸からは「鎌倉郷鎌倉里…（略）…天平五年九月」と書かれた木簡が出土し、郡里制の存在を裏付ける重要資料が出土している。また「高坐」、「官」、「田令」、「鎌倉別」と記された墨書土器も出土しており、大谷向原遺跡との関連性も窺える。

以上のように海老名市域周辺には、相模国分二寺跡とともに、奈良～平安時代の大規模集落遺跡が多く、一部には有力氏族との関わり等が考えられる遺構も認められている。



第２図　周辺の奈良～平安時代の主要な遺跡

２．調査歴（第３図）

望地遺跡はこれまでに14次の調査が行われている。明治期に望地地区の畑地から、土器や石器が多く発見されており、遺物が濃密に散布することは古くから知られていた。記録として現れたのは、昭和32（1957）年に児島氏によって採集された縄文時代中期の深鉢型土器が最初である（児島1958）。

望地遺跡内で初めての発掘調査は、昭和56～58年にかけて行われた県営住宅の建設に先立った第１・２次調査である。調査区は、舌状に張り出した丘陵の南端部に位置し、時期不明の小竪穴16基、奈良・平安時代の竪穴住居址が８軒確認されている。縄文時代中期の遺物が多く出土しており、小竪穴の約半数は形状から陥し穴と想定される（江藤1984・海老名市1998）。

第３次調査は、範囲確認調査として行われたが、遺跡が残存しておらず、遺構、遺物は確認されなかった。第４次調査は、本第９次調査の北西に位置し、平安時代と想定される竪穴住居址１軒、縄文時代の竪穴住居址４軒、土器埋設土坑が確認されている。第５次調査は、第９次調査の北側に位置する。奈良時代の竪穴住居址１軒、時期不明の溝状遺構が確認されている。

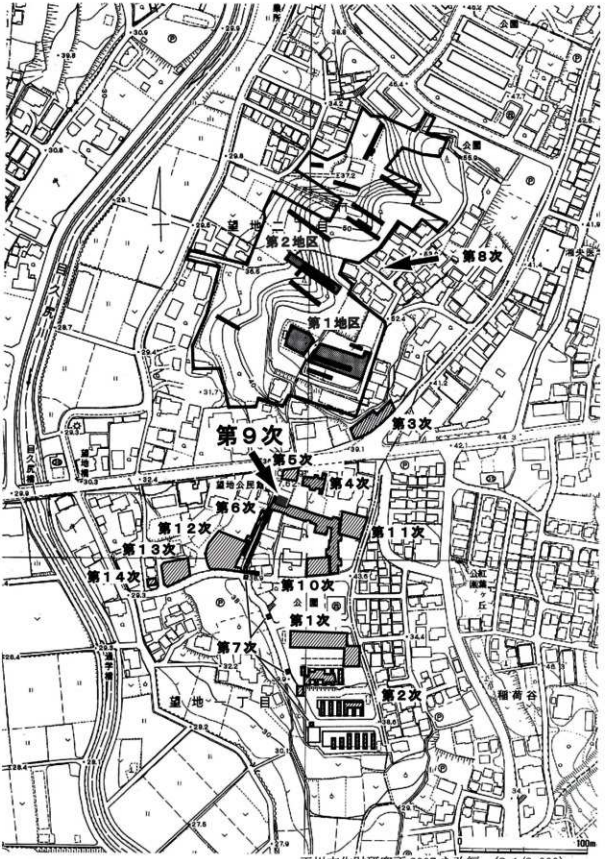
第６次調査は、第９次調査の南側隣接地に位置する。縄文時代の竪穴住居址９軒、陥し穴、土坑、ピット、奈良～平安時代の竪穴住居址２軒、掘立柱建物址１棟、道路状遺構４条、溝状遺構が検出されている。道路状遺構の内１条は、本次調査で確認された遺構と連続するものである。第７次調査は下水道工事に先立つ16㎡の調査であったが、遺構、遺物ともに出土していない。第８次調査は区画整理事業に先立つもので、丘陵頂部の第１地区と西側斜面の第２地区に分けて調査が行われた。第１地区は、過去の造成により大きく削平されており、縄文時代の包含層は消滅していたが、縄文時代中期の竪穴住居址５軒、掘立柱建物址１棟、陥し穴４基、土坑、ピット群が確認された。第２地区は古代から中世にかけての溝状遺構が確認されている。

第10次調査では、奈良～平安時代の道路状遺構１条、ピットが確認された。第11次調査では、縄文時代中期の竪穴住居址２軒、奈良～平安時代の竪穴住居址４軒、掘立柱建物址１棟、土坑、ピットが確認された。

第12次調査では、縄文時代の竪穴住居址２軒、土坑２基、奈良～平安時代の道路状遺構３条、近世の土坑10基、溝状遺構10条が確認されている。１、２号道路状遺構は両側に側溝を持つ。３号道路状遺構は、上幅７ｍ以上、下幅４ｍ以上、全長約35ｍを測る。底面からは波板状の凹凸の掘り方が確認されている。

第13次調査では、奈良～平安時代の道路状遺構２条、ローム採掘坑１基、土坑３基、中世の溝状遺構１条、近世の土坑３基が確認された。第14次調査は、第13次調査の西側隣接地にあたり、試掘調査により道路状遺構の延長が確認されたことから、発掘調査が行われた。第14次調査では、縄文時代の土坑、奈良～平安時代の道路状遺構１条、土坑、中世の溝状遺構が確認された。

14次に亘る発掘調査により、望地遺跡では、縄文時代中期の集落跡、奈良～平安時代の集落跡及び道路状遺構、中世の溝状遺構及び多くの遺物が確認され、海老名市内の歴史を語る上で重要な遺跡と位置づけられる。



玉川文化財研究所 2007 を改編　(S=1/3,000)

第３図　望地遺跡調査位置図

第２表　望地遺跡調査等歴

調査次数	調査年度	目的	調査機関	内容	文献
1	S56	県営住宅建設	海老名市望地遺跡調査団	発掘調査	江藤昭1984
2	S57	県営住宅建設	海老名市望地遺跡調査団	発掘調査	江藤昭1984
3	H2	共同住宅建設	海老名市望地遺跡第３次調査区調査団	範囲確認	神奈川県教育委員会1992
4	H4	共同住宅建設	望地遺跡発掘調査団	発掘調査	海老名市遺跡調査会1998
5	H6	個人住宅	海老名市教育委員会	発掘調査	神奈川県教育委員会1996
6	H10、11	道路工事	望地遺跡発掘調査団	発掘調査	望地遺跡発掘調査団1999
7	H10	下水道工事	望地遺跡発掘調査団	発掘調査	望地遺跡(第７次)発掘調査団1999
8	H16～18	区画整理事業	玉川文化財研究所	試掘調査 発掘調査	玉川文化財研究所2007
9	H17	個人住宅	海老名市教育委員会	発掘調査	本書
10	H18	学術調査	海老名市教育委員会	範囲確認	神奈川県教育委員会2008
11	H20	個人住宅	海老名市教育委員会	発掘調査	海老名市教育委員会2009
12	H26	宅地造成	株式会社盤古堂	発掘調査	株式会社　盤古堂2014
13	H26	長屋住宅建設	有限会社プラフマン	発掘調査	有限会社プラフマン2015
14	H26	住宅建設	有限会社プラフマン	発掘調査	有限会社プラフマン2015

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法（第４図）

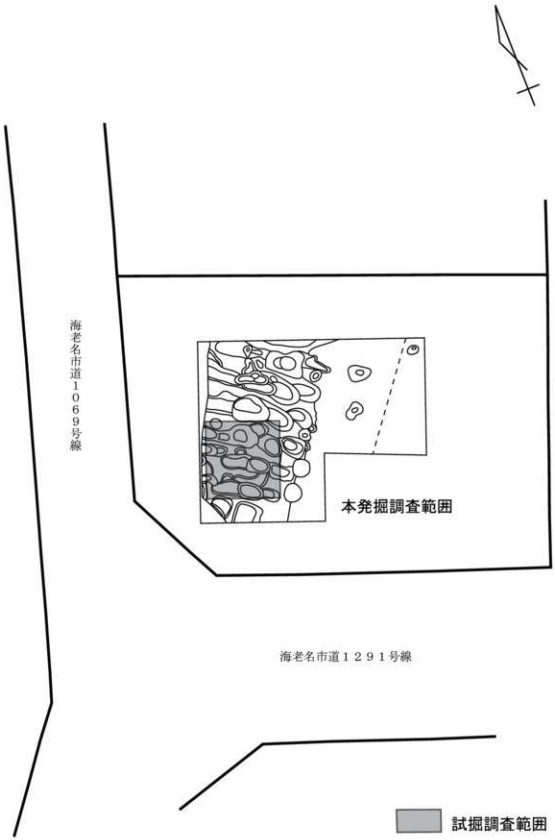
平成17年８月２日～４日に行った試掘調査では、事業計画地に２×２ｍの調査区を１箇所設定し、平均1.3ｍの深度まで調査を行った。現地表下1.3～1.5ｍにおいて道路状遺構の硬化面が広がり、土師器や須恵器とともに焼土及び炭化物が確認された。

一度埋戻しをした上で、事業者と協議を行い、埋蔵文化財の届出等の事務手続きが成され、８月15日～20日までの６日間、発掘調査を実施した。住宅建築に伴う切土範囲のうち、23㎡について調査対象範囲とした。表土層の深度約0.6ｍまでは、バックホウにより土を取り除き、それ以下については、人力で掘り下げを行った。

第２節　基本層序

現地表下0.3～0.9ｍまでは、造成時の盛土であるⅠ層であり、その下面には耕作土の旧表土であるⅡ層が約0.3ｍ堆積している。Ⅲ層は宝永火山灰層であり、部分的に確認されている。道路状遺構はローム漸移層を掘り込む形で検出されている。縄文時代の包含層は確認されておらず、道路状遺構がつくられる際に整地され消滅していることが考えられる。

当該地は丘陵の縁辺部に近い斜面地に位置し、もともとの堆積土層が薄かったことも想定されるが、過去の造成等により土層の残存状況は良くない。



第４図　調査区配置図

第３節　発見された遺構と遺物

道路状遺構が１条、ピットが３基確認された。出土遺物につていては、奈良～平安時代の土師器、須恵器、瓦、縄文土器、石器の他、近世以降の陶器の小破片が数点出土している。遺物の総量は試掘調査分を含め、遺物収納箱２箱で、土師器の総量は1737ｇ、須恵器1169ｇ、瓦1090ｇ、縄文土器3028ｇ、石器414ｇ、陶器13ｇであった。

１．奈良～平安時代

（１）道路状遺構（第５、６図、第４、５表、写真図版１－２～５－１、５－３）

地表面から0.3～0.9mのⅡ・Ⅲ層直下で掘り込みを伴う道路状遺構を確認した。主軸は南西から北東方向で、おおむねＮ－40°－Ｅを指す。土層断面から確認された幅は約５m、長さは約５mである。西側は過去の造成時に削平されており、全体幅は不明であるが、第６次調査において確認された道路状遺構の幅は4.5m前後とされており、丘陵の頂部に向かってやや幅広になる可能性もある。

道路状遺構は、確認面から深さ0.6mの緩やかな溝状を呈している。硬化面は２面（第３層、第４・５層）確認されており、遺構の確認面から深さ約0.4mで、硬化面の第３層が確認された。溝状の掘り込みの底にあたる道路状遺構の中央部では、第３層の硬化面の下から、波板状の凹凸面が確認され、窪み内は第４、５層として硬く締まっている。波板状の凹凸は、楕円状の平面形をしており、幅約３mの中にほぼ平行に３～４列の掘り込みが認められた。第２層の上面からは、焼土が確認されている。側溝は確認されていない。

道路状遺構の覆土である第１、２層及び第３層の硬化面直上で、土師器や須恵器、瓦の破片が出土している。１の土師器は、内外面ともにハケメ調整がされ、胎土に雲母を含む甲斐型の小型甕である。２、３は、相模型の土師器坏である。４～７は、須恵器坏であり、４、６、７の底部は回転糸切がされている。８は須恵器の蓋で、つまみ部は残っていない。９は、須恵器の甕の胴部であり、外面はタタキ調整が施されている。10、11は平瓦で、凸面は縄目のタタキ、凹面は布目痕が残る相模国分寺創建期の乗越瓦窯など三浦半島産の瓦である。このほか、小片のため図化できないが、須恵器の瓶の頸部や土師器等が覆土中から出土している。出土遺物の年代は９世紀後半が中心である。

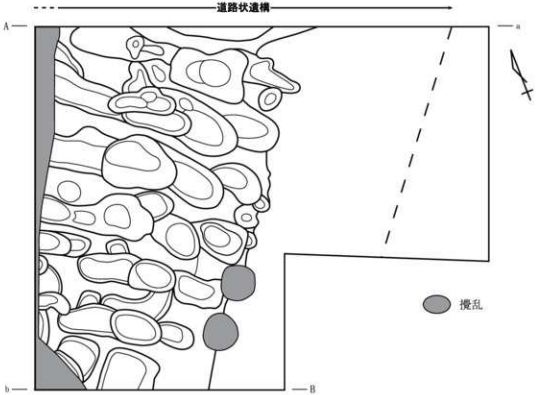
２．縄文時代

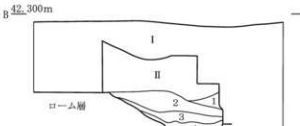
（１）ピット（第７図、第３表）

ローム層面を掘り込む形で、ピットが３基確認された。いずれも遺構に伴う遺物は出土しておらず、明確な時期は不明であるが、土層から縄文時代の遺構と判断される。

第３表　ピット一覧表

No.	長径(cm)	短径(cm)	深度(cm)
１号ピット	62	43	68
２号ピット	51	25	49
３号ピット	28	24	48





Ⅰ層　表土　盛土

Ⅱ層　茶褐色土　粘性、しまり弱い。旧耕作土。

Ⅲ層　黒灰色土　粘性、しまり弱い。宝永火山灰。

1層　暗褐色土　極小～小の黄褐色スコリア１%、極小の赤褐色スコリア１%含む。粘性、しまりやや弱い。

2層　黒褐色土　極小～小の黒褐色スコリア５%、極小の黄褐色スコリア２%、極小の赤褐色スコリア３%含む。粘性普通。しまりやや弱い。

2'層　黒褐色土　２層に類似するが、焼土を含む。

3層　暗褐色土　極小～小の黒褐色スコリア１%、極小の赤褐色スコリア１%含む。粘性、しまり普通。道路状遺構（硬化面）

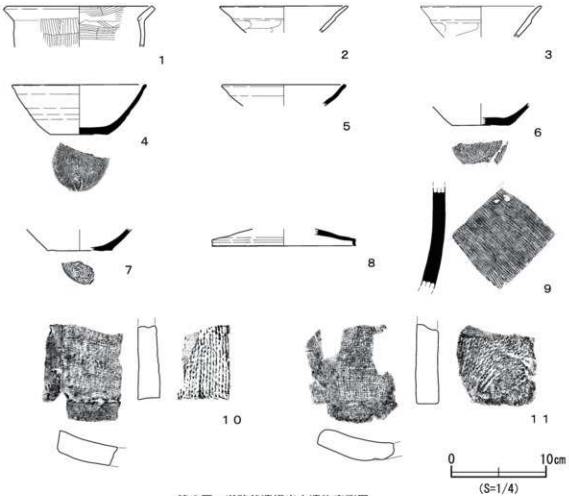
4層　暗褐色土　極小の赤褐色スコリア１%含む。粘性、しまりやや強い。道路状遺構（硬化面）

5層　赤褐色土　極小～小の黒褐色スコリア２%、小～中の黄褐色スコリア５%、小～中の赤褐色スコリア５%含む。粘性やや弱く、しまり強い。道路状遺構（硬化面）

第５図　道路状遺構平面図・断面図

遺構外出土遺物（第８図、第６表、写真図版５－３）

縄文時代中期の土器片、石器が出土している。そのうち、石器２点を図化した。



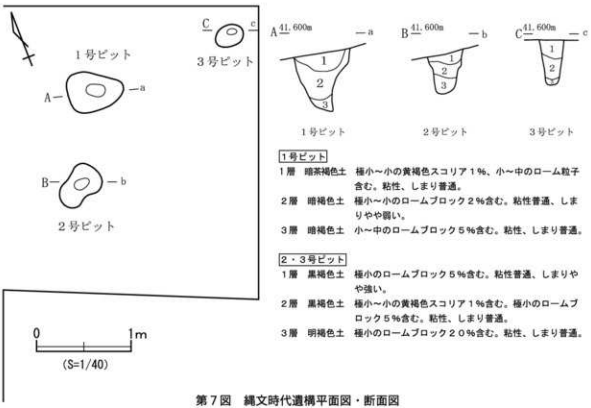
第６図　道路状遺構出土遺物実測図

第４表　道路状遺構出土土器観察表

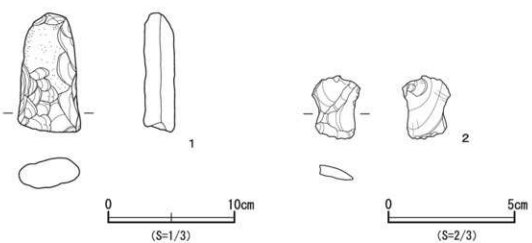
No.	種別	出土位置	器形	法量(cm)			部位・残存度	色調	胎土	備考
				口径	底径	器高				
1	土師器	試掘調査	小型甕	(16.0)	–	(4.3)	口縁部小片	にぶい赤褐色	密　細礫　雲母	内面ヨコ方向ハケメ、外面タテ方向ハケメ
2	土師器	試掘調査	坏	(13.6)	–	(2.8)	口縁部小片	明褐色	密　細礫	口縁部ナデ、外面体部ケズリ
3	土師器	試掘調査	坏	(12.8)	–	(3.3)	口縁部小片	にぶい褐色	密　細礫	口縁部ナデ、外面体部ケズリ
4	須恵器	試掘調査	坏	(14.2)	(6.0)	5.3	底部片2/3	黄灰色	密　白粒　細礫	底部回転糸切
5	須恵器	硬化面上3層	坏	(13.2)	–	(2.3)	口縁部小片	黄灰色	密　白粒　細礫	
6	須恵器	試掘調査	坏	–	(6.0)	(2.3)	底部片	灰色	密　白粒　細礫	底部回転糸切
7	須恵器	試掘調査	坏	–	(6.8)	(2.2)	底部片	黄灰色	密　白粒　細礫	底部回転糸切
8	須恵器	1，2層	壺	(15.2)	–	(1.8)	口縁部小片	灰色	密　白粒　細礫	
9	須恵器	試掘調査	甕	–	–	–	胴部片	灰色	密　白粒　細礫	外面タタキ

第５表　道路状遺構出土瓦観察表

No.	種別	出土位置	凸面	凹面	厚さ(cm)	色調	胎土	焼成	備考
10	平瓦	試掘調査	縄タタキ	布目	2.2	灰色	密　白粒　細礫	良好	
11	平瓦	試掘調査	縄タタキ	布目	2.2	橙色	粗　白粒　細礫　馬雲母	軟	摩耗



第７図　縄文時代遺構平面図・断面図



第８図　遺構外出土遺物実測図

第6表　遺構外出土遺物観察表

No.	種別	出土位置	法量(cm, g)				石材	備考
			長さ	幅	厚さ	重さ		
1	打製石斧	遺構外	(9.5)	5.0	2.4	165	砂岩	一部欠損
2	剥片	遺構外	2.5	1.9	0.5	2	黒曜石	

第４章　まとめ

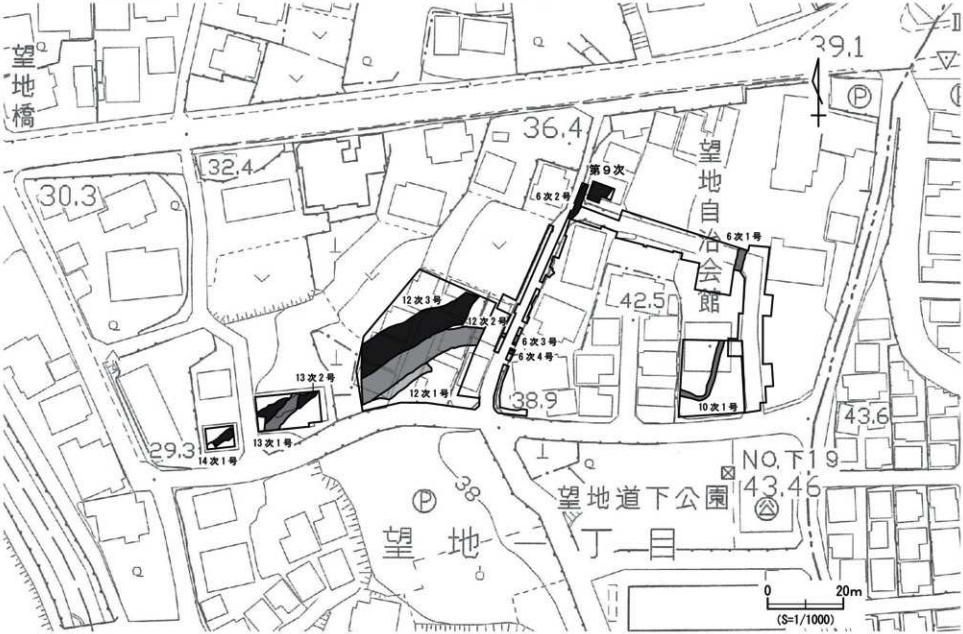
望地遺跡では、これまでの発掘調査により、奈良～平安時代の竪穴住居址を中心とした遺構が多く確認されているが、古代の道路状遺構が初めて確認されたのは第６次調査であった。第６次調査では１～４号の道路状遺構が確認され、このうち２号道路状遺構は南西から北東方向に延びる波板状の凹凸の掘り方を持つものであり、幅約4.5m、９mの長さで確認された。第９次調査で確認された道路状遺構はこの２号道路状遺構と同じ遺構である。関東ローム層を道路方向と直行して幅40～50cmのいわゆる波板状の掘り込みを連続して設け、掘り込みを暗褐色土で充填、突き固め、２面の硬化面が形成されている。土層断面からは、波板状の掘り方部分よりもさらに上幅が広がった溝状の掘り込みであったことがわかり、調査区内では最大幅約５mを測る。本来はもう少し幅の広い掘り込みであり、最も深い部分が波板状に掘り込まれ、その上に硬化面が形成されたものと判断される。

望地遺跡では、この他第10、12～14次調査で道路状遺構が確認されており、望地遺跡の中央を横切る県道より南側は道路状遺構が集中する地点となっている。このうち第12次調査では３条の道路状遺構が確認されており、複数回の造り替えが行われているものとみられる。第12次調査の南西側の第13次調査でも２条、第14次調査でも１条の道路状遺構がそれぞれ確認されている。側溝がなく、波板状の凹凸の掘り方が見られる構造と延長の方向から、第12次調査の３号道路状遺構が第９次調査の道路状遺構の延長と考えられる。第12次調査で３号道路状遺構から分かれるように、向きを東にとる１、２号道路状遺構が、第６次調査で南東から北西方向に軸を持つ３、４号道路状遺構につながる可能性が考えられ、３、４号道路状遺構は、第10次調査区内でほぼ90度北側に折れ、第６次調査の１号道路状遺構に繋がるものと想定される（第９図）。各道路状遺構の構築時期としては、出土土器に８世紀代のものは見られず、９世紀以降の所産であるものとみられる。

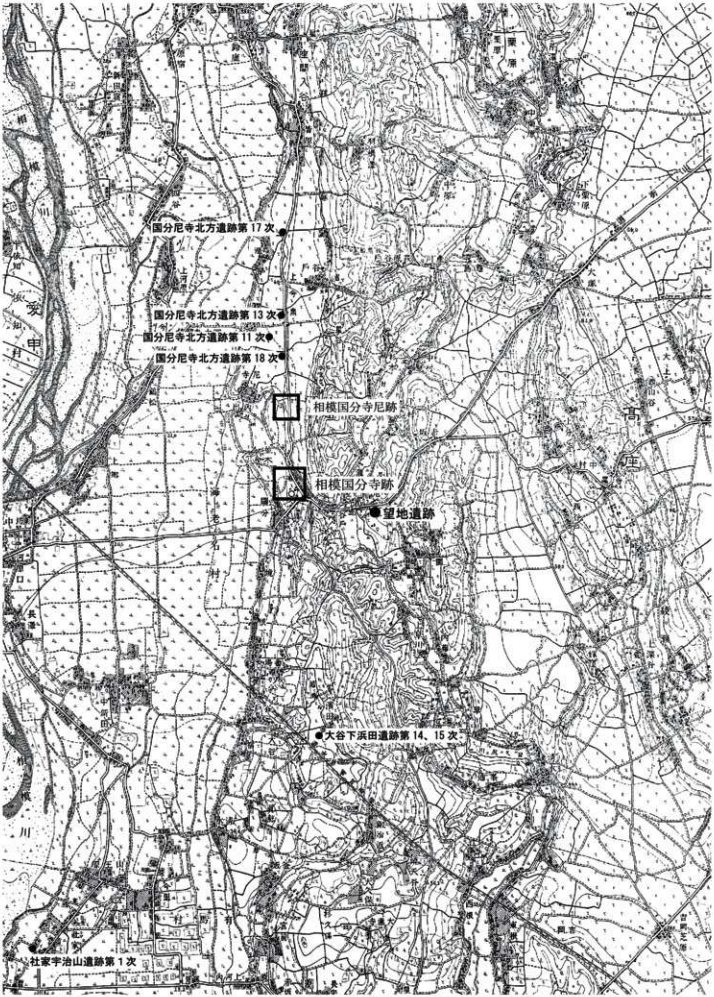
海老名市の国分南から大谷地区にかけては、北に向かう「宝亀二年以降の東海道」（武蔵への連絡路、奥州古道）と、北東に向かう矢倉沢往還に踏襲される東西方向の主幹道路が交差する地点にあたっている（第11図）。望地遺跡はこの矢倉沢往還に踏襲される「延喜式の東海道駅路」のルート上にあたっており、一連の道路状遺構はまさにこの道に該当するものと考えられる。

海老名市域は他にも発掘調査により、古代道が多く確認されている。主なものとしては国分尼寺北方遺跡第13、18次調査で側溝を持つ幅４～７m以上の南北方向の道路状遺構、大谷下浜田遺跡第14、15次調査の座間丘陵頂部を東西に横切る幅６m以上の道路状遺構、社家宇治山遺跡でも南西から北東に向かう幅2.4～５m道路状遺構がそれぞれ発見されている。国分尼寺北方遺跡第18次調査で確認された南北道は、中世まで使用されていたものとされ、武蔵への連絡路として考えられるほか、大谷下浜田遺跡、社家宇治山遺跡で確認された道路も鎌倉郡家や愛甲郡家へ至る伝路に比定されるものであろう。このほか、国分尼寺北方遺跡第11次、17次調査で東西方向に横切る道路状遺構が確認されており、国分尼寺北方遺跡第13、18次調査で発見された南北方向の道路状遺構と交わることが想定される（第10図）。

前述のとおり、望地遺跡の南西側には武蔵への連絡路と「延喜式の東海道駅路」が交差す



第9図　望地遺跡の道路状遺構



第10図　海老名市内の古代道路状遺構

る地点の存在が予測されているが、その周辺には浜田駅家が想定されている。望地遺跡の道路状遺構は、南西側が目久尻川に向かっており、さらに目久尻川を挟んだ南西側は再び座間丘陵となり地形的に平坦面は少ない。これよりさらに南西の相模野台地中津原面では幅は狭いながら安定した平坦面を形成しており、望地遺跡で確認された道路状遺構を直線的に延長するとした付近には国分南原西遺跡がある。国分南原西遺跡第２次調査では９～10世紀代の竪穴建物址が11軒、土坑や焼土址、東西方向の浅い溝が見つかっており、建物址の覆土や土坑中からは瓦が多く出土している。これまで、浜田駅家の場所については、上浜田遺跡周辺を想定することが多かったが、望地遺跡の道路状遺構と地形的な観点から、国分南原西遺跡周辺についても注目される。

田尾誠敏ほか 2017 を一部改編

第11図　望地遺跡周辺の古代交通路

引用・参考文献

江藤昭　1984　『海老名望地遺跡』　海老名望地遺跡調査団
海老名市　1998　『海老名市史』１資料編原始・古代
海老名市遺跡調査会　1992　『大谷向原遺跡』
海老名市遺跡調査会　1998　『海老名市望地遺跡－第4次調査－　国分尼寺北方遺跡－第12次調査－発掘調査報告書』
海老名市教育委員会　1990　『相模国分寺関連遺跡１－尼寺跡の調査（1989～90年度）－』
海老名市教育委員会　1990　『相模国分寺関連遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ－相模国分尼寺跡（推定中門・金堂跡）の調査－』
海老名市教育委員会　1992　『相模国分寺関連遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ－相模国分尼寺跡（推定講堂・中門・経蔵跡）の調査－』
海老名市教育委員会　1993　『相模国分寺関連遺跡詳細分布調査報告書Ⅲ－相模国分尼寺跡平成４年度埋蔵文化財発掘調査事業－』
海老名市教育委員会　1994　『相模国分寺関連遺跡詳細分布調査報告書Ⅳ－相模国分尼寺跡平成５年度埋蔵文化財発掘調査事業－』
海老名市教育委員会　2009　『望地遺跡第11次発掘調査概要調査報告書』
海老名市教育委員会　2012　『史跡相模国分寺跡』
海老名市教育センター　1988　『海老名、その大地の生いたち』　海老名市教育委員会
海老名市№36遺跡発掘調査団　2004　『海老名市№36（内出）遺跡発掘調査報告書』
大谷市場遺跡発掘調査団　2003　『大谷市場遺跡発掘調査報告書』　玉川文化財研究所
大谷真鯨遺跡調査団　1992　『大谷真鯨遺跡』
児島鉚造　1958　「望地出土の勝坂式縄文土器につて」『杉久保土合横穴古墳群調査報告』　海老名町文化財保存会・海老名町教育委員会
児島鉚造　1970　『郷土の史料』　海老名町
国分尼寺北方遺跡調査団　1996　『国分尼寺北方遺跡－第７次・第８次調査－』
神奈川県教育委員会　1979　『上浜田遺跡』　神奈川県埋蔵文化財調査報告15
神奈川県教育委員会　1992　『神奈川県埋蔵文化財調査報告34』
神奈川県教育委員会　1995　『神奈川県埋蔵文化財調査報告37』
神奈川県教育委員会　1996　『神奈川県埋蔵文化財調査報告38』
神奈川県教育委員会　2008　『神奈川県埋蔵文化財調査報告52』
神奈川県立埋蔵文化財センター　1987　『宮久保遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告15
(財)かながわ考古学財団　1998　『国分尼寺北方遺跡－第17・18次調査』　かながわ考古学財団調査報告61
(公財)かながわ考古学財団　2011　『社家宇治山遺跡』　かながわ考古学財団調査報告264
(財)かながわ考古学財団　2009　『杉久保内藤原遺跡　杉久保内藤原横穴墓群　杉久保釜坂遺跡』かながわ考古学財団調査報告235
田尾誠敏・荒井秀規　2017　『藤沢市史ブックレット８　古代神奈川の道と交通』藤沢市文書館
玉川文化財研究所　2007　『望地遺跡第８次調査発掘調査報告書』
玉川文化財研究所　2012　『大谷下浜田遺跡第14次調査(海老名市№69遺跡)発掘調査報告書』
中山毎吉・矢後駒吉　1924・1934　『相模国分寺志』　海老名村
㈱盤古堂　2014　『望地遺跡第12地点調査概要報告書』
樋口清之　1963　『発掘』　学生社
藤沢市教育委員会博物館準備担当　1997　『神奈川の古代道』
㈲プラフマン　2009　『国分南原西遺跡第2次調査』
㈲プラフマン　2015　『望地遺跡第13・14次調査』
本郷遺跡調査団　1991　『海老名本郷Ⅷ』
本郷遺跡調査団　1995　『海老名本郷XI』
本郷中谷津遺跡発掘調査団　1993　『本郷中谷津遺跡－第８次調査－』　相武考古学研究所
望地遺跡発掘調査団　1999　『望地遺跡－第６次調査－』
望地遺跡(第７次)発掘調査団　1999　『望地遺跡(第７次)調査概要』

1　調査地近景（南東から）

2　道路状遺構硬化面（西から）

写真図版２

1　道路状遺構完掘状況（南東から）

2　道路状遺構波板状凹凸面（南西から）

1　道路状遺構北側土層堆積状況

2　道路状遺構南側土層堆積状況

1　試掘調査状況（南から）

2　試掘調査遺物出土状況

6図1

6図2

6図3

6図4

6図5

6図6

6図7

6図8

6図9

6図10

6図11

1　道路状遺構出土遺物

8図1

8図2

2　遺構外出土遺物

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

3　図化不能出土遺物

1～5　道路状遺構出土須恵器
6、7　道路状遺構出土土師器
8～12　遺構外出土縄文土器

報 告 書 抄 録

ふ り が な	もうちいせきはっくつちょうさほうこくしょ　－だい９じちょうさ－
書 名	望地遺跡発掘調査報告書　－第９次調査－
編 著 者 名	今野まりこ・押方みはる
編 集 機 関	海老名市教育委員会
所 在 地	〒243-0422　神奈川県海老名市中新田377番地　TEL 046-235-4925
発 行 年 月 日	2018年３月20日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
もうちいせきだいきゅうじちょうさ 望地遺跡第９次調査	かながわけん 神奈川県 えびなし 海老名市 もうち 望地一丁目 208ばん 208番１	14215	34	35° 27′ 11″	139° 24′ 20″	20050815 ～ 20050820	23	個人住宅 建築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
もうちいせきだいきゅうじちょうさ 望地遺跡第９次調査	集落跡	奈良～ 平安時代 縄文時代	道路状遺構 ピット	土師器、須恵器、 瓦、縄文土器、 石器	波板状凹凸面のある古代の道路状遺構が確認された。

要 約	本遺跡では波板状凹凸面のある道路状遺構の一端が確認された。望地遺跡では第６、12～14次調査で幅５～７ｍほどの道路状遺構が確認されており、９次調査の道路状遺構が続いているものと判断される。本地点付近は延喜式の東海道駅路ルートにあたり、一連の道路状遺構は延喜式の東海道駅路と推定される。

・本書は長期保存を考慮し、全て中性紙を使用しています。

【紙質】　表紙　　レザック66
　　見返し
　　例言・目次・本文・奥付　　書籍用紙
　　扉
　　写真図版　　アート紙

【印刷】　写真図版以外は電算写植によるオフセット印刷
　　写真図版はカラー印刷、ダブルトーン印刷（主版黒色＋副版グレー）

・文化財保護、教育普及、学術研究を目的とする場合は、著作権者の承諾なくこの報告書の一部を複製して利用できます。なお、利用にあたっては出典を明記してください。

・この報告書に係る記録図面（写真類を含む）は、海老名市教育委員会で保管していますので、利用する場合は連絡の上、必要な手続きをとってください。

望地遺跡発掘調査報告書　－第９次調査－

発行日　平成30年３月20日
編　集　海老名市教育委員会
発　行　海老名市教育委員会教育部教育総務課文化財係
　　神奈川県海老名市中新田377番地　TEL 046－235－4925